

日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業 プログラム

—平成30年度の報告と学習者オートノミーの構築—

安 原 順 子

1. はじめに

異文化間コミュニケーションは、一方的ではなく双方向的でなければならない。reflective journal（学習ダイアリー）^{注1}を使用する双方向授業を生かし、海外の大学との間で日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業を実施し、eポートフォリオに学生が提出したreflective journal（学習ダイアリー）や教案を質的に分析することで、学習者オートノミーを育てるプログラムについて研究する。また、日本語教育・日本語学習において、学習者を主体とし、双方向に有益となる本学習プログラムの研究は、今後も遠隔授業の一形態として必要不可欠とされる研究である。

本稿では、特に本年度のプログラムについて「学生の気づき」を今後さらに発展させるプログラムの改革について報告する。

2. 先行研究

これまでの研究では、海外の大学との双方向学習プログラムを対象とした研究報告はほとんどなく、したがって授業モデルの構築にも至っていない。わずかにある研究も、web上のオンライン（Black boardやmanaba^{注2}等）を使用した研究ではない。

本研究代表者が実施した双方向授業では、神戸女子大学の日本語日本文学演習Ⅱ受講生には、実践を通じた学生の日本語教育への意欲の向上が見られた。また、AUTの日本語授業受講生には、授業の課題作文提出数の増加が見られるなど、双方に一定の成果がみられた。つまり、双方向授業の形態が日本人日本語教員の養成と外国人の日本語学習において効果があると実証できたのである。

3. 研究の意義と研究の位置づけ

本研究は、授業における実践を研究対象とし、海外との交流が増加する中、遠隔授業の一つとしての授業モデルを構築するところに独自性と創造性がある。

さらに、本研究は以下のような学術的独自性と創造性を持つ。

- (1) 双方向授業の形態をeポートフォリオとして活用し、授業モデルを構築している点。
- (2) reflective journalの使用とそのeポートフォリオ化により、学生自身の「学びの気づき」と「学習者オートノミーの構築」を重視している点。

(35)

本研究の成果から、海外の日本語学習機関との新しい学習プログラムの構築と質の向上が見込まれる。さらに、その結果が双方向授業を使用した学習プログラムの構築へとつながる。

近年、国内外の外国人への日本語教育において、マルチメディアを使用した日本語教育への関心は大いに高まりを見せている。

本研究課題は、その中で日本と海外との「双方向授業」を研究課題の中心とし、特異な位置を占めている。つまり、以下の3つの効果が期待できる。

①学生が主体的に学修し、成果を実感できる。(自己評価)

学びについての気づき、学びの実感を得られ、今後の学びについて展望を得られる。
つまり、学習者オートノミーの育成に繋がる。

②reflective journalの使用と分析、eポートフォリオ化により、学生自身に加えて、担当教員も授業の効果や問題点を把握しやすい。(教員による評価)

授業の効果や学生の問題点の把握ができ、毎回の学生指導にも寄与することができる。
つまり、教師オートノミーの発達に繋がる。

③学生同士の相互評価が期待できる。(相互評価)

外国人学生、日本人学生間で、互いに学習についての内省が期待できる。つまり、協働学習による相互評価が期待できる。

本研究は、遠隔授業の一形態として、さまざまな学習者主体の学修プログラムにも応用が可能であり、普遍性を持つ研究課題であると考えられる。主役は学習者であり、双方向学習プログラムは学びを促進するツールとして活用でき、学びのネットワークの起点となる。本研究を基礎研究として位置付ければ、さらに双方向学習プログラムの活用方法が拡がり、波及的な効果も期待できる。

異文化間コミュニケーションの一形態である外国文化・外国人との接触は、一方向的なものではなく双方向的でなければならない。日本語教育・日本語学習において、双方向に有益となる学習プログラムは、今後、遠隔授業の一形態としても必要とされるものである。

4. 研究計画・研究方法

平成28年度から3年間をかけた研究である。本年度は、完成年度に該当する。

(1) 日本語教員養成と日本語学習者のため双方向学習プログラムモデルの構築と検証

神戸女子大学学生:双方向授業などを通し外国人の書いた日本語を読んだり、話した日本語を聞いたりすることや、実際に外国人への日本語指導を通して得た知識や指導力を、eポートフォリオの提出物から振り返る。

AUT学生:日本人学生と接して、日本語学習に対する学習姿勢にはどのように変化

があったか。

(2) 双方のreflective journalを質的に分析した結果から考察した学習効果の検証

使用する質的分析は、SCAT (Steps for Coding and Theorization) と称され、言語データを4ステップでSCATフォームに書き込み、さらにストーリー・ラインと理論を記述するというものである。^{注3}

4-1 研究の進め方

- (1) まず、以下に示す授業（文字を使用する双方向授業、音声を使用する双方向授業）を中心に、AUT（オークランド工科大学）研究者とともに学習プログラムモデルの試案を作成し、実施する。
- (2) 学習者のreflective journal、指導案、レポートを、その他の資料とともにeポートフォリオ化して保存し、質的に分析する。
- (3) AUT研究者と協力して、双方向からの視点で分析を行う。
- (4) プログラム有効性について検証し、さらに改良を加え、構築したeポートフォリオを活用した双方向学習プログラムが他の機関での授業モデルとなるようにする。

4-2 研究方法

・eポートフォリオに提出した以下の対象授業のreflective journal、指導案、レポートなどを分析し、自己評価、相互評価、教師による評価を行う。

・双方の学生は、以下の授業に参加し、毎週各自が学習を自己評価して、その結果をreflective journalとして双方向授業ではAUT onlineに提出、常時「学習の振り返り」を行う。質的分析の一部を「表1.」に示す。

・神戸女子大学学生は、外国人日本語学習者の使用する日本語から、文法・音声の誤用についてレジュメにまとめて授業で発表し、eポートフォリオとして提出する。

対象となる授業1:

対 象 者：神戸女子大学…3年生の日本語日本文学演習Ⅱ（日本語教育ゼミ）

AUT…3年生主体のJapanese in the Global World (JGW、AUT日本語科では最上級レベルの本語クラスで、ヨーロッパ言語共通参照枠CEFR・B2レベル相当する)

参加学生：神戸女子大学…10名（日本人学生および留学生）、AUT…10名

授業内容：双方向授業…AUTonline使用し、実施する。

双方向授業のテーマ：「ソトから見た日本人、ウチから見た日本」、「海外長期滞在と移住」など。

AUT と神戸女子大学生でグループを作り、グループごとに一つのブログを用意する。

番号	発話者	テ ク ス ト	(1)テキスト中の注目すべき語句	
1	JS1	長期海外滞在・海外移住というテーマでお互いの考えや経験について話し、海外で過ごすと言葉の壁や文化の違いなどに戸惑ったり困ることがあるが、カルチャーショックを受けたりすることにより今まで見ていなかった新しい視点から世界を感じることができると感じた。	お互いの考えや経験 言葉の壁や文化の違い 戸惑ったり困る カルチャーショック 新しい視点から世界	
2	JS2	ニュージーランドは多民族国家であるため、様々な国から移住してくる人も多く、普段から様々な国の人と関わりがあるため、海外移住などについても考えたり、積極的に移住したいと思う人も多いのかなと感じました。一方で、日本は多民族国家ではないので、旅行で海外に行ったり、留学に行ったりはするけれど、実際に移住してる人数は他の国と比較すると少ないと思います。そのため、実際に海外に移住するというイメージがつかないのかなと思いました。	ニュージーランドは多民族国家 移住してくる人も多く様々な国の人と関わり 積極的に移住したいと思う人も多い 日本は多民族国家ではない 海外に移住するというイメージがつかない	
3	JS3	日本語を学ぶのが1番楽しい授業だという人がいること。	日本語を学ぶのが1番楽しい授業 いること	
4	JS4	日本をどう思っているのか、またニュージーランドがどういった国なのかを知ることが出来ました。日本を好きだと言ってもらえて嬉しかったです。	日本をどう思っているのかニュージーランドがどういった国なのか 知る 日本を好きだ 嬉しかった	
5	JS5	AUTではいろいろな国の人が通っているので文化の違いがある。日本で当たり前のアルバイトでの丁寧な接客などが丁寧すぎるといったことが当たり前ではないということが一番驚いた。	AUT いろいろな国の人の文化の違い 日本で当たり前 アルバイトでの丁寧な接客 当たり前ではない 一番驚いた	
6	JS6	考え方が違うので、文章の書き方も違うことです。	考え方が違う 文章の書き方も違う	
7	JS7	他の国の文化やニュージーランド人の生活を理解できて、自分の視野を広げられて、よかったと思います。 AUTonlineを使用して、いろいろなことを勉強できるし、本当に役に立つと思います。それにニュージーランドにいる友達もできてよかったです。	他の国の文化やニュージーランド人の生活 理解できて 自分の視野を広げられて よかった AUTonlineを使用、いろいろなことを勉強 役に立つニュージーランドにいる友達 できて	

表1. H30 神戸女子大学学生のreflective journal分析例

	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
	考えや経験の交換 悩み カルチャーショックという新しい経験 新しい視点	異文化接触により異文化について新しい発見をする	異文化接触により新たな知見を得る	新たな知見から得られたものはどのように役立つか?
	多民族国家 多くの人との交わり 気づき ニュージーランドと日本との相違点	異文化接触により、新たな気づきを得る	異文化と出会い、気づきを得る	気づきからさらに得られるものは?
	異文化接触による驚き	異文化についての驚き	異文化についての驚き	異文化についての驚きがもたらすものは?
	新しい知識の獲得 好感度	異文化に接触し、理解を深め、自国を再評価する	異文化交流を通じ、自国を再評価する	日本への評価は、良い評価だけか?
	異文化接触による驚き 日本良さ	異文化接触により、自国文化について新しい発見を得る	異文化間コミュニケーションを通して、自国の良さに気づく	他にも、日本が外国と違う、評価されるのは、どのようなところか?
	異文化についての発見	異文化について新しい発見をする	それぞれの考え方の相違は、文章の書き方にも反映される	考え方の違いを知ることには、どのような利点があるか?
	異文化を理解し、自分の考え方を広げる	異文化を理解し、知識を得て自分を高める	異文化を理解することが、自己啓発に繋がる	相手の文化を理解できれば、具体的に何が得られるか?

(39)

(1) ブログ使用の授業：文字を使用する双方向授業

①AUT 学生は2週間ごとに各テーマについての課題作文をブログに書き込む。

②神戸女子大学生は、それに対するコメントをブログに書き込む。

(2) スカイプ使用の授業：音声を使用する双方向授業

①担当教員がスカイプでのインタビューを設定し、ブログのテーマに沿って日本人学生が用意し、ブログ上に書き込んだ質問に答える。1グループ約10分間の交流を行う。

②担当学生に、2週間ごとに与えられたテーマについてビデオレターで三つの質問を行い、その質問の答えをビデオレターとして受け取る。

授業終了後は、各自が担当したAUT学生についてレジュメを作成し、日本語日本文学演習Ⅱ（日本語教育ゼミ）で発表する。

対象となる授業2： 日本語模擬実習、日本語チューター

参加予定学生等：神戸女子大学3・4年生

授業内容：日本語指導の実践…eポートフォリオを通して実習の指導を行い、教育実習案、教材、reflective journalを提出する。

(1) 日本語模擬実習（海外教育実習を含む）

校内、海外でeポートフォリオを活用した日本語教育実習を実施する。

(2) 日本語チューター

授業の一環として外国人留学生・研修生対象の1回完結型の日本語指導を毎週行う。

指導は、外国人が日本語で「～できる」ことを重視する。また、Plan（企画）、Do（実施）、Check（点検）、Action（改善）というPDCAサイクルを重視し、常に外国人のニーズの変化に対応できるようにする。

5. 学生の気づきと学習者オートノミー

異文化間コミュニケーションにおいてオンライン上の双方向授業とreflective journal（学習ダイアリー）を使用することにおいては、その効果が質的に分析され、有効性は実証されている。しかしながら、それだけでは、十分な知識と指導力を持った日本語教員の養成や日本語学習者の育成にはつながらなかった。そこで、これまでの双方向授業の研究成果を踏まえて、新たに学習者オートノミーを育てる e ポートフォリオを使用した双方向学習プログラムを構築し、遠隔授業の一形態としても必要とされる授業モデルを研究対象とすることにした。本研究は、科学研究費採択課題である「日本語教員養成と日本語学習者のための双方向学習プログラムの研究」（課題番号 16K02832 平成28年度～平成30年度）をさらに発展させた研究内容となる。

例えば、「対象となる授業1」に以下のような授業を付加する。

合同発表：両大学の学生がグループでテーマを選んで協働し、online上で発表する。

次の研究課題では、これまでの成果に「学習者の自律性」を助ける学習を付加したプログラムを、研究対象とする。いわゆる自分で学んでいける学習者を育てる「学習者オートノミー」に焦点をあてて、さらに双方向授業についての研究を継続・拡張する準備は整っていると言える。

- ①学生が主体的に学修し、成果を実感できる。（自己評価）つまり、学習者オートノミーの育成に繋がる。
- ②reflective journalの使用と分析、eポートフォリオ化により、学生自身に加えて、担当教員も授業の効果や問題点を把握しやすい。（教員による評価）つまり、教師オートノミーの発達に繋がる。
- ③学生同士の相互評価が期待できる。（相互評価）

外国人学生、日本人学生間で、互いに学習についての内省が期待できる。つまり、協働学習による相互評価が期待できる。

さらに、遠隔授業の一形態として、さまざまな学習者主体の学習プログラムにも応用が可能であり、普遍性を持つ研究課題であると考えられる。主役は学習者であり、双方向学習プログラムは学びを促進するツールとして活用でき、学びのネットワークの起点となる。本研究を基礎研究として位置付ければ、双方向学習プログラムの活用方法が拡がり、波及的な効果も期待できる。

6. まとめ

3年間の研究成果は、学習者の学習への意欲の向上とともに、海外の日本語学習機関との新しい学習プログラムの構築が見込まれる。その結果は、双方向授業を使用した学習プログラムの構築へと拡がり、さらに、その成果をより強固な内容するために「学習者オートノミーの育成」に繋がる。

今後、「学習者オートノミーの構築」を重視する研究は、日本語教員養成と日本語学習に資するオンライン上の双方向授業において、eポートフォリオ等を活用し、学生が自律的に学習する学習者オートノミーを育てる授業プログラムを構築できると考える。

謝辞： 本研究はJSPS科研費 JP16K02832の助成を受けたものです。

注

注1 常時、各自が学習を自己評価し、その結果を提出、「学習の振り返り」を行うために使用する。

(41)

注2 神戸女子大学onlineシステム。

注3 大谷尚（2008）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第54巻第2号。本研究課題のような小規模データ分析に適した方法。

参考文献

桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習』凡人社

大谷尚（2011）「SCAT:Steps for coding and Theorization：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』日本感性工学会、第10巻3号、pp.155-160

舘岡洋子（2015）『日本語教育のための質的研究入門』ココ出版

中田賀之編（2015）『自分で学んでいける生徒を育てる』ひつじ書房

安原順子（2017）「日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業プログラム—平成29年度の報告—」『神女大国文』第29号pp.51-57

安原順子（2016）「日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業プログラム—現状と問題点—」『神女大国文』第27号pp.106-112

Thomas, D. R. (2006) A General Inductive Analyzing Qualitative Evaluation Data, American Journal of Evaluation, pp.237-246